

## NEWS &amp; TOPICS

## 宮崎学園短期大学フェスティバル

平成24年12月1日/保育科 12月8日/初等教育科・音楽科・人間文化学科  
於 イオンモール宮崎 イオンホール

## 保育科

11月に本学で実施した内容にクリスマス企画を加え、多彩なプログラムと自由あそび、「風船ぶたさん」と「ケーキヤさん」の製作コーナーで、おおいに楽しいイベントとなり、450名もの来場者に喜んで頂きました。

今年度の学生参加は64名で1、2年生の保育フェスティバル委員が各組60分前後の「あそび」を担当しました。2年生はこれまでの経験を生かし、はつらつとした笑顔で子どもたちと交流し、1年生は2年生の姿から多くの事

を学びました。また、今年度は「地域共生」履修の1年生も活躍しました。

この保育フェスティバルは5年目を迎え、1・2年生の協力態勢が出来、運営・運営もスムーズになってきました。来年度も学生の創意工夫とさらなる活躍を期待しています。

(保育科 守川 美輪)



## 初等教育科・音楽科・人間文化学科

三学科合同の短大フェスティバルは、初等教育科のミニ・シアター、音楽科のミニ・コンサートをメインステージにおいて、そのまわりを人間文化学科の小企画コーナーで埋めていくという布陣で行われました。

イオン開店が朝9時に変更になっていたこともあり、集合は朝8時20分になりましたが、参加学生達は寝坊することなく集まり、搬入もスムーズに。

さて、学生達は小さなお客さん達が入場して席に着いたとたん、エネル

ギー全開モードになっていました。教師も数々の心配が杞憂になって、一安心。

シアターで笑い、コンサートで聞き入り、マナーに触れ、血圧をはかり、メモリアルフォトを合成し、風船に喜び……100名以上参加されたご家族に楽しいひと時を提供できた、かな?

何はともあれ、学生達には「仕事は人のために」を実践した一日になったようです。随分、話しかけるための一歩が踏み出せるようになりました。

(人間文化学科 塚本 泰造)

## 第12回日本音楽療法学会学術大会を終えて

第12回日本音楽療法学会学術大会が、日野原重明会長のもと2012年9月7日、8日、9日と宮崎市のシーガイアコンベンションセンターにて開催されました。学術大会参加者が約1,300人、県民講座の一般参加者が1,500人、3日間延べ5,500人の方々にご参加頂き大変大きな大会となりました。本大会において、音楽科学生と附属みどり幼稚園園児は、ミュージカル「ぞうれっしゃがやってきた」に出演し、素晴らしい演奏を披露しました。涙、涙の感動の中、多くの方々から大変な好評を頂きました。そして、本大会の運営を支えたのが、福祉専攻の学生と教職員のボランティアの皆様です。マンゴー色のポロシャツの学生達と教職員は、朝早くから夜遅くまで、裏方に徹し働いて下さいました。多くの会員の皆様方から、「マンゴー色の皆様が頑張ってくれましたね。ありがとう。」との言葉を頂戴しました。大会実行委員長としての任務を終えて私の心に一番残ったものは、学生達が見せてくれたすがすがしい笑顔でした。本学を挙げてご協力いただきましたことに深く申し上げます。

(山下 恵子)

平成24年度卒業証書・学位記並びに  
修了証書授与式のご案内

平成25年3月19日(火) 10:00~11:00  
於 本学体育館

多くの保護者の参列をお待ち申し上げます。卒業式終了後、卒業生は教室で学級主任から証書等を受け取ります。保護者の方もどうぞ教室にお入り下さい。

## 本年度の就職状況と就職への心構え

企業は厳選志向が強まり、昨年度同様に厳しい就職戦線となっています。この様な状況では、一次突破の筆記試験や自己表現の重要性を考慮準備しておく事が大切です。また、企業訪問や説明会参加など積極的な姿勢が必要です。

保育園・幼稚園・施設等は昨年度同様に求人数が多く、年内に就職希望者の多くが内定しています。なかには厳しい結果に諦めず挑戦し、良い結果を得た人もいます。皆さんの明るく諦めずに挑戦する活動を期待します。

(就職指導課 佐土原 敦)

## 学生の地域交流活動

今年度、「地域共生I・II」前期・後期を履修した91名の学生を中心に、昨年5月から今年1月まで地域のさまざまなイベントに参加し、イベントの一部の企画運営やボランティア活動を行って参りました。そのまとめとして、1月25日(金)の午後、本学の教職員と学生、そしてイベントで交流のあった清武支所や社会福祉協議会、清武商工会、地域の施設や保育園などの代表者の方々にお越しいただき「地域交流推進委員会」を開催いたしました。

この会では、学生による交流活動から学んだことについての発表もあり、学外での学びの意味を再確認することができました。また、地域の方々からも「学生が来てくれたことで、イベントが活気ついた」「学生が頑張って手伝ってくれたのでとても助かった」「これからも継続してほしい」「失敗を恐れずにこれからも積極的に参加してほしい」「清武地域まちづくり協議会と連携しさまざまなイベント運営をしてほしい」「これからも積極的に短大の学生と関わっていきいたい」と、非常にありがたいお言葉を頂きました。

この交流活動が始まって5年、まだまだ課題はありますが、このほど地域の方々との絆を感じることができた日はありませんでした。これからも、地域と支え合える「宮崎学園短期大学」であることを祈ります。

(地域共生I・II 授業担当 川越志保)



## 春のオープンキャンパスのご案内

平成25年3月10日(日)  
9:30~12:30

展示、ミニ講座、入試相談コーナーも開催。JR宮崎駅、南宮崎駅、清武駅から無料送迎バスあり。詳しくは、入試広報部にお問い合わせ下さい。

フリーダイヤル ☎ 0120-310-796



礼ちゃん 勤くん  
宮崎学園短期大学マスコットキャラクター

## 2 後援会だより

February 2013 Vol. 20



あそびうたユニット  
「ラージちゃんあきらちゃん」による  
保育科2年生向け特別授業

## 学長所感

## 天にも人にも恥じ入ることがない

学長 山下 忍

三省堂が発行している辞書の一つに、「中国名言名句辞典」というのがあります。

読み物としてもなかなか味のある辞典ですが、ページをめぐって幾らも読み進まないうちに、「孟子」を典とする「仰ぎて天に愧じず、俯して人に忤じず」という言葉に出会います。「己の行いが清く正しく、天にも人にも恥じ入ることがない」の意で、わが身を省みても、その域に達するのは何とも至難のことだと思っていますが、この名言自体は、人として生きる上で大事にしていきたいと願っています。

それに、この言葉、「仰不愧於天、俯不忤於人」を堂々と口に出れることが絶無だというわけでもありません。

『学長折々の記』にも記したことですが、本学は、昨年のうちに第二巡目の「第三者評価」を受け、正月目前に、短期大学基準協会から機関別評価案の『内示』をいただきました。

手にした「評価結果の事由」には、「当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現及び教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を満



たしている」と判断した。」とありました。

私たちは、評価をしっかりと受けるために、天にも人にも恥じ入ることのない努力をしました。その努力の根底には、この機会に、学生の、そして、教職員の、そしてまた、地域社会の短期大学として、確固として存続するに足る姿を打ち立てたという志がありました。

天下に、大きく胸の張れる大学を創出するためには、まだまだやり遂げなければならないことが多々あります。しかし、平成24年度は、どうしても成し遂げなければならないことを、この第三者評価において、また、改組転換において、果たし得た年度でありました。

いつも強く思い、口にもしていることですが、人や組織が充実し、進展するためには、「誇り」が不可欠です。本学は、今年度手にした誇りを大切にしながら、25年度の歩みを力強く進めます。

# この一年を振り返って

## 保育科

### 伝統とは「紡ぎ合い」のなかで伝達される

保育科長 野坂 敬

本年度もあとわずかで終わろうとしています。昨日入学した1年生ももうすぐ2年へと進みます。また、様々な実習や授業に戸惑いながらも取り組んでいた2年生も就職がほぼ決まり、もう卒業間近となっています。

この1年間を振り返ると、学生たちが、それぞれの悩みを抱えながらも自分らしさを忘れず、先輩たちの後ろ姿を見ながら精一杯の頑張りで乗り越えて行った姿に、成長とは「努力」と「伝統の力」の結果であることを実感した一年でした。そのことを特に感じたのは「保育フェスティバル」の直前の練習でのことでした。1年生の出し物練習では、練習不足がはつきりしており、何回やっても間延びし、呼吸が合わず、明日への不安を抱かせる状況が続いたまま本番を迎えることになりました。ところが2年生が終わって次を受け持った1年生の姿たるや、昨日と同一人物である事が信じられない自信にあふれた姿に代わっていました。直前に先輩の自信あふれる姿を見、子どもたちの笑顔を見ることが自然に体が動き、明るい声とともに、チーム一丸となって子どもたちに接する学生の姿が子どもたちの動きに伝わり、大盛況で次々に終了することができました。「子どもが好きだから」だけではなく、先

輩たちの動きや声掛けを見ながらの学びがそこに表れていました。「先輩の動きに引っ張られた」、「先輩に負けない」と言うその言葉に、本学が営々として築き上げてきた伝統の一端を見ることができました。それは、学生自らが考え、育て、影響しあひながら時間をかけて紡ぎあい、質の高いものに引き上げていく過程が息づいている事を実感した出来事でした。先日ある会で、参加者の方が「私は、第1回の保育科卒業生です。」と笑顔と自信に満ちた表情で挨拶にこられました。伝統とは、自信を持って「本学の卒業生」とであると胸を張り、「誇りを持って」言える事であると再認識した一場面でした。



## 音楽科

### 音楽は永遠に生き続ける

音楽科長 末平 浩康

音楽科にとって、この1年間は“変革の年”となりました。音楽科の学内外における音楽の充実が、豊かな広がりを見せれば見せるほど、現実を厳しく見つめなおさなければならない1年でした。そんな中、音楽科学生は、自分の専門を主に、さらに深く広く勉強してくれました。

音楽の勉強は、自分の専門を通して音楽を知り、音楽を通して芸術を知り、芸術を通して生きる意味につながらなければ、単なる“音楽バカ”で終わってしまいます。

そういう意味での24年度の大きな出来事は、何と云っても、宮崎市で行われた第12回日本音楽療法学会学術大会でのミュージカル「ぞうれっしゃがやってきた」公演です。

音楽科学生と教員、附属みどり幼稚園年長児と幼稚園教諭、一般合唱団混声「宮崎カノンコーラス」が一体となって取り組んだこの公演は、3千人もの聴衆を感動させました。あの日野原先生が大変感動され、“これぞ音楽療法の原点”なる評価をいただき、この学会の総まとめ役の山下恵子先生や出演者と大いに喜ぶことができました。音楽を通して地域への発信、日本への発信が実現したのです。

ところで、音楽科の個人の活躍もめざましいものがありました。数々のコンクールで上位の成績をあげ、「ここに短大音楽科あり！」を実証しました。一方、吹奏楽部や合唱団も大学部活動の大変さの中で頑張ってくれました。

さて、26年度から音楽科の募集が停止され、音楽科の灯が消えようとしています。音楽科卒業生や現在学生にとっては、とても悲しい出来事であるかもしれません。

しかしながら、音楽科という形、音楽棟という形はなくなろうとも、そこで培われた音楽そのものなくなりません！生きた音楽が永遠に生き続けることを信じています。



日本音楽療法学会学術大会にて上演されたミュージカル「ぞうれっしゃがやってきた」

幕が下り、拍手をされる(左から)大坪理事長、日野原先生、河野知事、山下学長

## 初等教育科

### 伝統のバトンタッチ

初等教育科長 松野 隆

短大において、先輩が後輩に伝統を引き継ぐ場面が数多くあります。例えば、4月の新入生歓迎を兼ねた「春の忍ヶ丘祭」と「昼食会」、7月の夏季オリエンテーションで実習を終えた2年生が自らの体験を1年生に語る「教育実習交流会」、12月の高校生対象の入学前教育スクーリングでの「学科紹介」、3月の「卒業生を送る会」など、その一つ一つに伝統を引き継ごうとする学生の心意気が感じられ、頼もしさを感じてきました。

特に、来年度入学の1年生が、初等教育科最後の学生となることもあり、12月の入学前教育スクーリングには、感慨深いものがありました。1年生、2年生の代表者が、自分たちの短大生活を分かりやすく説明し、高校生からの質問にユーモアを含め、丁寧に答えます。このような雰囲気の中で、高校生は次第にリラックスし、本学への期待を膨らませているようでした。

また、12月に実施した初等教育科1・2年生による「自己点検評価」では、次の5つの評価項目を設定し、5段階評定で次のような結果を得ました。1. 学校生活において、「礼節」を意識した言動ができましたか(4.0)。2. 学校生活において、「勤労」を意識した言動ができましたか(3.3)。3. 「授業に」主体的に参加でき

ましたか(3.8)。4. 「リテラシー向上」に向けて何らかの取組をすることができましたか(3.2)。5. 短大において「望ましい人間関係づくり」に努めることができましたか(4.2)。

最も高かったのが、5の「望ましい人間関係づくり」であり、逆に最も低かったのが、4の「リテラシー向上」でした。勉学への取組があと一歩という面はあったものの、和気あいあいの雰囲気の中で、学生達の温かい交流のあったことが想像できます。

本学の伝統を心に秘めつつ、本年度もそれぞれの学生が力を尽くしてくれたことに拍手を贈りたいと思います。



## 人間文化学科

### 学生の努力が光った

人間文化学科長 久保 良一

掲示板を見た学生達が「先生！合格していた!!」「先生！ありがとう!!」研究室に満面の笑顔で飛び込んでくる!また、別の研究室の前にも合格者名の掲示が!研究室の主に「なぜここに?」と聞えば、「その学生が合格したことが嬉しくて!」との答え。努力は、全員の心を一喜一憂させるものだとつくづく感じました。嬉しい限りです。この成果は、四季を通して日頃の学習や生活等の中で自分を高めようと「強い意識」を持って自分自身をコツコツと磨いた、努力の証明でしょう。

このように、今年も全力投球した学科生の努力に賞賛を贈ります。この目標を達成するために、「決してあきらめない心」を持ち、毎日、講義等に参加し、指導者に質問したり、クラスの友達と互いに教え合ったりして理解に努めました。例えば、後期の簿記検定の3、4時限目続きの授業でこの間の10分間の休憩時間に休憩しない。休憩しなさいと言っても休憩しない。190分、その後...。続けて頑張っている姿がそこにあり、教師として本当に誇らしくもあり自慢の学科生でありました。検定試験のほとんどが100%に近い合格率であります。

よく「継続は力なり」と言われますが、社会的認知度の高い検

定取得は、自分との心の戦いであり、まさにこの言葉通り毎日、毎日の地道な積み重ねが大きな成果を生むこととなります。そしてこれが、社会での「即戦力」になることは確実であります。検定試験への挑戦は、社会人基礎力の流れの一つでもあります。

今年も「決してあきらめない心」を持ち一生懸命全力投球した一年でありました。最後に「よかったね!」。



企業簿記の授業